

参考① 十月三十一日の資本論を読む会で、第九節工場立法で、田久保
会員より重要な指摘のあった箇所です。ページ五〇六・七行目、五〇七
ページ・七行目。簡単に通り過ぎてしまいがちな箇所ですが、指摘され
る資本主義と社会主義との労働の本質的な違いを説明している箇所な
です。

機械装置や化学的手続きやその他の方法をもって、近代工業はたえ
ず、生産の技術的基礎とともに労働者の機能と労働過程の社会的結合
を変革する。またかくしてたえず社会内の分業を変革し、たえず大量の
資本と大量の労働者とを、一生産部門から他の生産部門に投げ出す。し
たがって大工業の性質は、労働の転換、機能の流動、労働者の全面的可
動性を必至のものとする。また他面では、その資本主義的形態において、
旧来の分業を、その骨化した個別性とともにも再生産する。いかにこの絶
対的矛盾が、労働者の生活状態の一切の安眠、固定、確実さを廃棄し、
彼の手から、労働手段とともにたえず生活手段を奪おうとし、彼の部分
機能とともに彼自身を無用化しようとするか、いかにこの矛盾が、労働
者階級の不断的犠牲性と労働力の無制限の濫費と社会的無政府の荒廃と
をもつて荒れ狂うか、それはすでに見たとおりである。これは消極的な
面である。

しかし、いまや労働の転換が圧倒的な自然法則としてののみ、また到る
ところ障害にぶつかりながら、自然法則の盲目的な破壊作用をもって
のみ、実現されるものとするれば、大工業は、その破局そのものを通じて、
労働の転換としたがって、労働者の能うかぎりの多面性を、一般的社
会的生産法則として承認し、その正常な実現に諸事情を適合させること
を、生死の問題とする。大工業は、種々に変化する資本の搾取欲のため
に予備として保有され利用しうる窮乏した労働者人口という奇怪な事
変化する労働諸要求に、応じうる人間の絶対的利用可能性を置換えるこ
とを、すなわち、一つの社会的細部機能の担い手たるにすぎない部分個
人に、種々の社会的機能を交互に転換的活動様式とする全体的に発達し
た個人を置換えることを、一つの生死の問題とする。

参考② ページ四九八・六行 第三巻で立返ろう。
「工場立法に対するブルジョワの反抗」

第三巻での、ここでの工場立法の叙述に該当する記述は、別紙全目次
のうち、第三巻第一部 第一章第五節の「不変資本の充用における節約
ペー」の一〇六・九行目以降である。
この節約は、資本家用語では、建物の節約と言われる、狭い健康
な場所に労働者を溢れさせること、同じ場所に危険な機械装置を詰め込
んで、危険にたいする防止手段を怠ること、その性質上健康に有害であ
るか、または鉱山におけるように危険を伴う生産過程において保安策を
怠ること、等々に及んでいる。」以下略

第二節 労働者を犠牲としてなされる労働諸条件の節約
ページ一一〇・二行目 「工場主たちは、当時マンチエスターで工場
立法にたいする反抗のため、組合を、結成していった。」以下略

資本論全三巻 章立て全目次

第一章 資本の生産過程 1867.9.14	第5章 不変資本の充用における節約
第1節 商品と貨幣	第6章 価格変動の影響
第2章 交換過程	第7章 補遺
第3章 貨幣または商品流動	第2節 利潤の平均利潤への転化
第2節 貨幣の資本への転化	第8章 相異なる生産部門における資本の不等な組成とそれから生ずる利潤率の不等
第3節 絶対的剰余価値の生産	第9章 一般利潤率（平均利潤率）の形成と市場価格の生産価格への転化
第4章 労働過程と価値増殖過程	第10章 競争による一般利潤率の均等化、市場価格と市場価値、超過利潤
第5章 労働過程と不変資本	第11章 労働価値の一般的諸要素が生産価格に及ぼす影響
第6章 労働日	第12章 補遺
第7章 剰余価値の率と剰余価値の量	第3節 利潤率の傾向的低下の法則
第8章 相対的剰余価値の概念	第13章 この法則の理由
第9章 協業	第14章 反対に作用する諸原因
第10章 分業と工場立法	第15章 この法則の内的矛盾の展開
第11章 協業	第4節 商品資本及び貨幣資本の商品取引資本および貨幣取引資本への転化（商人資本）
第12章 分業と工場立法	第16章 商品取引資本
第13章 協業と大工業	第17章 商業利潤
第5節 相対的剰余価値の生産	第18章 商人資本の転化、諸価格
第14章 絶対的剰余価値の生産	第19章 貨幣取引資本
第15章 労働力の価値と剰余価値との量的変動	第20章 商人資本にかんする歴史的考察
第16章 剰余価値率の種々の定式	第5節 利子と企業者利得とへの利潤の分割、利子付資本
第6節 労働賃金	第21章 利子生み資本
第17章 労働力の価値又は価格の労働賃金への転化	第22章 利潤の分割、利子率、利子率の「自然」な
第18章 商業資本	第23章 利子と企業者利得
第19章 商業資本の循環	第24章 利子生み資本の形態における資本関係の外在
第20章 商業資本の循環、諸価格	第25章 信用と架空資本
第21章 商業資本の循環、諸価格	第26章 貨幣資本の循環、その利子率に及ぼす影響
第22章 剰余価値の資本への転化	第27章 資本主義的生産における信用の役割
第23章 資本主義的蓄積の一般的法則	第28章 流通手段と資本、トックおよびフランドンの見解
第24章 いかにして剰余価値が蓄積されるか	
第25章 近代積立制度	
第二章 資本の流通過程 1885.5.5	第二章 利子と企業者利得とへの利潤の分割、利子付資本
第1節 資本の積立とそれらの循環	第29章 銀行資本の構成成分
第2章 資本の循環	第30章 貨幣資本と現貨資本 I（結）
第3章 商品資本の循環	第31章 貨幣資本と現貨資本 II（結）
第4章 循環過程の三つの形	第32章 貨幣資本と現貨資本 III（結）
第5章 流通期間	第33章 信用制度のもとにおける流通手段
第6章 流通費用	第34章 連貫主義と1844年のイギリス銀行立法
第7章 資本の回転	第35章 命争い、競争相場
第8章 回転期間と回転速度	第36章 資本主義以前
第9章 固定資本と流動資本とにかんする諸學說、農業學派とアダム・スミス	第6節 超過利潤の地代への転化
第10章 固定資本と流動資本とにかんする諸學說、農業學派とアダム・スミス	第37章 差額地代、総論
第11章 固定資本と流動資本とにかんする諸學說、リカー	第38章 差額地代の第一形態（差額地代 I）
第12章 労働期間	第39章 差額地代の第二形態（差額地代 II）
第13章 生産期間	第40章 差額地代 II-第一、生産価格が不安な場合
第14章 流通期間	第41章 差額地代 II-第二、生産価格が低下する場合
第15章 回転期間が資本前貸の大きさに及ぼす影響	第42章 差額地代 III-第一、生産価格が上昇する場合
第16章 可変資本の回転	第43章 差額地代 III-第二、生産価格が上昇する場合
第17章 剰余価値の流通	第44章 農家等耕地にも生ずる差額地代
第18章 補論	第45章 絶対地代
第19章 対象についての従来の諸學說	第46章 地盤地代、地山地代、土地価格
第20章 蓄積と拡大再生産	第47章 資本主義的利得の生成
第21章 蓄積と拡大再生産	第7章 諸要素とその他の要素
第三章 第一部 資本主義的生産の総過程 1894.10.4	第48章 三位一体の定式
第1節 剰余価値の利潤への転化、および剰余価値率の利潤率への転化	第49章 生産過程の分析のために
第2章 利潤率	第50章 命争いの分析
第3章 剰余価値率にたいする利潤率の関係	第51章 分配諸関係と生産諸関係
第4章 回転の利潤率に及ぼす影響	第52章 階級
	補遺(エンゲルス)
	1 価値法則と利潤率
	2 取引所

参考③ エンゲルス「イギリスにおける労働者階級の常態」
一八九二年ドイツ語版への序言、から

エンゲルスは「イギリスにおける労働者階級の常態」を書いたのは一
八四四年、一九二四年のイギリスの労働者階級の状態に
命は、四年、二才のイギリスの労働者階級を半に減らすの
した。工場法に規定する労働時間短縮は、十八世紀後半に
書かれた「二年の労働時間短縮」をエンゲルスは半世紀を経て同
書の九二九年の序言で、エンゲルスは半世紀を経て同
工場の独占を打ち破る一八四四年に、エンゲルスは半世紀を経て同
工業の独占を打ち破る一八四四年に、エンゲルスは半世紀を経て同
エンゲルスの序言を抽出して「エンゲルスは半世紀を経て同

